

第14回aacaサロン 漆に魅かれて

会員増強委員会

第14回目となる今回のサロンは漆工芸家の齋藤卯乃さんと漆装飾研究者の齋藤潮美さんのお二人より「漆」の採り方から未来への展望まで様々な話を伺った。会場は箱根ガラスの森美術館やポーラ美術館にも近い仙石原にある齋藤漆工芸の小塚山展示室。アトリエも徒歩2-3分の場所にある、木々に囲まれた清閑な環境で開催された。紅葉も終盤ではあったが箱根一帯は観光客も多く、現地に來られた方々は一苦労であったろう。

漆と言えば「器」をイメージする方が多い中、今回のサロンを通して印象がだいぶ変わったのではないだろうか。スライドでの作品や研究内容に加え、漆の採り方、下地、塗り、磨き等々漆の作品を創る工程を動画も用いて細かに説明頂いた。卯乃さんからはご自身の作品のコンセプトや色、質感、塗りなどについて丁寧に説明頂き、併せて寺社仏閣の彩色や陶器の漆の塗りなども紹介頂いた。潮美さんからはベトナム・フエにあるグエン朝王宮の修復を中心に説明頂き、建築や彫刻との結びつきや近代のベトナム漆工技術は日本や中国、フランスの影響を受けたことも初めて知ることになった。研究だけではなく鉄木(てつぼく)に漆の塗りの工程を記し伝承しようとされている事には敬意を表したい。

卯乃さんの漆作品の工程は完成までに非常に多くの時間を要する。根気と作品に対する執念を感じずにはいられない。それにより完成した作品は、観る人、観る方向、ほんの僅かな光によって陰影も変わり、印象も七変化する。果たして今見ている印象は作家の思惑なのか狙いなのか、けれど面白い。また、質感、質量、仕上げは「彫刻」と言っても過言ではない。いや、むしろ彫刻と言った方が潔い。ご覧いただいていない方は「百聞は一見

に如かず」である。

漆の素地には木・紙・竹・陶・金属・皮・布があるが、作品は布を用いた素地による乾漆がほとんどである。発泡スチロールなどで原型を創り、漆で布を貼り重ねていって乾燥してから中の原型を取り去る。これが彫刻のような量感を生み出すゆえんであろう。また、面と面が変わる稜線の仕上げ方が肝のようで、その仕上げは見事である。紙を素地とした紙胎による和紙による作品も見せて頂いたが全く別の作品であり同じ作家の作品には見えない。兎に角、作り方でも七変化する「漆」、とても興味を惹かれ魅せられる素材である。

早稲田大学中川武名誉教授に師事され研究院客員准教授である潮美さんは漆装飾研究者。と言っても当協会のBOX展では作品を出展し佳作入賞している。漆の研究やベトナム・フエの歴史的建造物群の漆・彩色装飾技術の研究に留まらず、実際に保存修復に携わり、ベトナムにおける技能・技術・知識の教育や未来に向けた継承も併せて考えているところに「漆」の未来を感じられる。表現者としての卯乃さん、研究者としての潮美さん、姉妹が「漆」に関わり歴史・文化を紡ごうとしていること自体が他に類を見ない。これからも「漆」の歴史・文化を継承すると共に新しい「漆」を見出してほしいと心から願う。

サロンにはお二人の恩師の中川先生もご出席され内容が濃いものになった。感謝申し上げる。サロンでの話は尽きず、次の機会では御三方によるトークがあれば盛況間違いなしと思う。

最後に一点だけ、是非、漆作品の外部展示手法と建築・都市・ランドスケープとのコラボレーションも考えてほしい。

(三菱地所設計 山極裕史)

開催日:2024年11月27日

話し手:漆工芸家 齋藤卯乃さん

漆装飾研究者 齋藤潮美さん

モデレーター:三菱地所設計 山極裕史

会場:齋藤漆工芸 小塚山展示室



展示スペース全景 左上は潮美さんの研究展示



サロン風景 奥は展示室



サロン風景 話し手は中川先生



卯乃さんによる作品説明



潮美さんによる研究説明

展示台左手前が鉄木の漆工程見本手板